潮騒

第25号
平成20年
1月1日

財団法人　日本殉職船員顕彰会
〒102-0083　東京都千代田区麹町四-五
海事センタービル
電話　〇三-三二二二-〇六六二
FAX　〇三-三二二二-〇六八二

年頭のご挨拶

財団法人　日本殉職船員顕彰会
会長　相浦　紀一郎

明けましておめでとうございます。皆様におかれましては、さわやかな新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

年頭に当たり、一言ご挨拶申し上げます。

旧年中は、賛助会員、協賛会員ならびに関係者の皆様には、当会の事業運営に多大のご支援ご協力を賜り、お陰さまをもちまして事業も滞りなく実施できましたことを、改めて厚く御礼申し上げます。

顧みますと、六万余人の尊い犠牲を払った先の大戦後六十三年が過ぎ、ご遺族は高齢化し、現在では兄弟や子供・孫へと世代も代わり、戦争の風化が進む中、ややもすればあの悲惨な戦争によって祖国のために犠牲となられた戦没船員への思いも薄れようとしています。

折しも昨年五月十一日旧全国戦没殉職船員遺族会が解散されましたが、残された事務を弊会がお引き受けしております。

申し上げるまでもなく、当会の設立目的は、先の大戦で戦禍に倒れ尊い犠牲となられた戦没船員と、戦後のわが国の復興を支えてきた海運・水産業のなかで不幸にして海難や労働災害にあわれ、殉職された船員の慰霊顕彰と遺族援護であります。

今日、海運・水産業も大きく変貌し、なかんずく船員を取り巻く諸環境も大きく変りましたが、現在の発展と平和は、尊い犠牲の上にあることを決して忘れてはなりません。

私達は、二度とあのような悲惨な戦争を繰り返さないためにも、戦没船員への慰霊顕彰事業の重要性を改めて広く国民に伝えていく必要があると思います。

本年も当会の事業運営は極めて難しくなることは明らかでありますが、設立当時の初心に帰り、決意も新たに戦没・殉職船員の慰霊顕彰と、ご遺族の援護に一層の努力を続ける所存でございます。

何卒変わらぬご支援ご協力を賜りますようお願い申し上げ、新年のご挨拶とさせていただきます。

碑文石前の献花

第三十八回戦没・殉職船員追悼式は、五月十五日(木)開催。詳細は案内状で

終戦記念日の献花式

終戦記念日の献花式

終戦記念日の平成十九年八月十五日、戦没船員追悼の行事は、例年のとおり横須賀市の観音崎公園内にある「戦没船員の碑」前において、当会の役職員および関係団体代表等約三十人が参列し執り行われた。

正午から武道館において開催された政府主催の全国戦没者追悼式の進行にあわせて行われたものである。

立秋とはいえ、真夏の暑さに参列者は汗滴る中、全員で献花と黙祷を行い、戦没者の御霊に祈りを捧げた。

「安らかにねむれわが友よ
波静かなれとこしえに」

鶴沢小学校四年生
（左）末吉勇也君（中）仲田旬希君（右）永田恭一君

戦時徴用船遭難の記録画展

千葉市美術館に800人

悲惨な戦争を伝えよう

「太平洋シーレーン作戦」のビデオを見る来場者

太平洋戦争中物資輸送などのため軍に徴用され、潜水艦、航空機などにより爆撃を受けた民間の船舶や船員の様子を描いた「戦時徴用船遭難の記録画展」が、平成十九年十一月二十日から二十五日まで、千葉市美術館で開催された。六日間で約八百人が来場。千葉県での開催は平成十二年九月船橋市以来七年ぶり二回目。戦没船員のご遺族はもちろんのこと、生還船員、船員OB、高校生や子供達は、当時徴用された遭難船の最期、三十七点の記録画を真剣に鑑賞し、また、同時に放映された戦時下のわが国海運のビデオも食い入る様に見ていた。

昭和十六年十二月八日太平洋戦争が始まり、戦線は次第に西太平洋全域に拡大され、軍事物資の輸送力として、船舶による海上輸送なしには戦えず、商船はもとより漁船や機帆船などあらゆる船舶が軍に徴用され、米軍（連合軍）による徹底した海上輸送路の壊滅作戦の前に、七千隻を超える船舶の喪失と六万余人の船員の犠牲者を出しました。

展示した記録画は、海上輸送に従事した船員や船舶の悲惨な実相を伝える貴重な作品で、大阪商船（現商船三井）の嘱託画家故大久保一郎氏が戦時中に描いたものです。

当時、大阪商船の岡田社長は戦争で次つぎと沈められていく会社の船の姿を記録に留めておきたいと考え、陸海軍の御用船になった社船が敵に撃沈されると、その生き残り船員から様子を聞いて忠実に描かせました。

この記録画展は、戦没船員のご遺族や関係船員はもちろん、広く一般の方がたにも戦争の悲惨さと平和の尊さを知って頂くために開催されています。

また、未だに戦没船員の碑や追悼式などの慰霊・追悼が関係者の努力で行われていることを知らない遺族の方もたくさんいます。その方がたに知っていただくためでもあります。

なお、記録画展の開催に先立ち、より多くの児童生徒に来てもらうために、千葉市鶴岡啓一市長、千葉市教育委員会岩切裕学校教育部長を訪ね、ご協力をお願いしました。

同級生3人で来場
（左）堀内勝成さん（中）岩槻正憲さん（右）佐藤正一さん

開場と同時に入場の
三岳力郎さん　千葉市

学校の授業で千葉の昔のことを調べにきた三人の小学生

末吉　勇也さん
仲田　旬希さん
永田　恭一さん
千葉市鶴沢小学校四年生

◆　記録画展を観てどう感じましたか。

○昔の戦争を見て、僕は生きることがそう簡単ではないと思った。
○戦争のことが感じられた。
○戦争時代にいた人はとても苦しいだろうなあと思った。

◆　戦争をどう思いますか。

○戦争は人の命を奪うからやってはいけない。
○見ていたらなんで戦争がおきたのかと思った。
○戦争は人を殺すからやめた方がよい。

◆　船についてどんなことを思いますか。

○船に乗っていろいろなところを回りたい。
○船は戦争と関係ないのになんで船なのかと思った。
○船に乗って海を旅してみたい。

絵画展の受付をした
(左)原亜美多さん(右)田中ちひろさん

二五五通のアンケートから　記録画展

六日間の開催期間中、来場者の方がたから貴重な感想やご意見を頂きました。ここにその一部をご紹介いたします。

原　亜美多さん　高校一年生　さいたま市

今までひめゆりの塔や長崎に行ってみても、戦争というものがどうしても実態として沸かず、戦争は自分とは無縁に思えていました。

でも、今回の絵画展に携わって、沈没した船に友人や親戚が乗っていたという人の話を隣で聞き、戦争は実際にあっていまだにその記憶に囚われている人もいるということがはっきりとしました。

すると戦争を知らなくてはいけないと思えてきました。私たちの世代は戦争を繰り返さないためにも戦争についてもっとよく知る機会が必要だと痛感した一日でした。

田中ちひろさん　高校一年生　さいたま市

今回の絵画展に触れて、自分が戦争を体験していないことを痛感した。というのは、戦争が悲惨であることを理解できても、心の傷として共有は出来ないのだ。こういう類の人は少なくないと思う。そして、この類の人間は、自分がいつか、戦争の悲惨さを軽視し、歴史を繰り返すかも知れないという危機感を持ち続けるべきである。そのために、私たちは何遍もの「理解」を通して戦争の悲惨さを、自発的に心に脳に植え付け続けなければならない。

三上晃久さん

二度と戦争は嫌　佐野みゆきさん　千葉市

何と多くの素晴らしい船と船員を失ったことかと思いました。一隻一隻が立派な船だったのに戦争のために本当にもったいない残念なことだったと思います。このように絵で見ることにより、生なましい胸に迫ってくるものがありました。風化させてはいけないと思います。ありがとうございました。

小林　智子さん　さいたま市

戦争については、メディアや本などでいろいろ目にすることはありましたが、船舶の被害については、あまり知らなかったので驚きました。

たくさんの船や船員の方が亡くなられていることは、とても悲しいことですし、これから私たちが平和についてしっかり考えていかなければならないと感じました。

三上　晃久さん　千葉市

日本のために戦って散った船員に対し心から追悼の意を表します。船員たちの姿を、後世忘れ去られることの無いよう絵に描いた大久保一郎氏の心中に、少しでも触れることが出来ればと思います。時代は移り変わり、当時のことを私にははるか昔

の出来事のように感じられてしまいますが、まさしく現実に起こったことであり、たった五十年生まれる年が早ければ、私も描かれている船の中に乗っていたかもしれない、というように感じられます。

当時の状況を絵画に残すということに感銘し、すごいことだと思いました。

佐藤　雄三さん　習志野市

父が第一次大戦参加した話を聞いて、戦中は海軍になると言い張っていた。しかし、小学生だった事が幸いした。兄は学徒動員、志願して行ったがこれも戦地に出る前に終戦。只ただ良かったと思う。

しかし、現代の全体が勝手な事を言っている時もどうかと思われる。

佐藤雄三ご夫妻

平和の尊さを学ぶ

野口　猛史さん　市原市

船に関係する方がたは、よく知っていることなのかもしれませんが、私にはこれまで接点がなく、この絵画展を見て新たな知識を持ちました。

家族で来場の野口猛史さんご一家

山下　光子さん　市原市

人間の尊い命を戦争という大義のために無駄にした時代…二度とこういう暗い時代を迎えてはならないと強く思いました。

小林　貴子さん　千葉市

初めて、記録画展を見させて頂きました。大久保画伯の絵は、とても迫力があり、感動致しました。六万人あまりの尊い命が奪われた戦争の悲惨さを、この絵を通して多くの方がたにもっともっと知って頂けたらと思います。

久津間　節子さん　千葉市

私の父は、日本郵船の船員で私の生まれる前に戦死してしまい、一度も会ったことがありません。今日の絵画やビデオを見て、亡くなっていった風景が、わかりました。さぞや、残念なことだったと思います。戦争は、本当にいやなものです。

三宅　勝利さん　千葉市

戦争末期の実態を体験した人間として大きな感銘を受けた。戦時中船舶砲兵として、乗船していた友人を誘って見学にきた。感無量である。

(左)三宅勝利さん友人(右)坂本安平

心の中で敬礼を

酒井たかゆきさん　千葉市

旧海軍軍人として当時在隊したことがあります。死なずに済んで現在八十歳感謝いたしております。

昭和十九年六月一日未明徴用船東豊丸で兄久夫は戦死しました。沈み行く船を描いた絵を見て身をつまらせる思いで心の中で敬礼をしました。

廣嶋　早苗さん　佐倉市

戦争を知らない世代がほとんどを占める今の日本でやはりこのような記録画展は当時の日本を知りえる良い機会となると思う。子供や孫を連れて訪れたいと思った。

井田　陽一さん　佐倉市

徴用された客船の最期の姿に感動を覚えると同時にこのような無謀な戦争に突き進んだ国家権力に強い憤りを感じた。大久保画伯の素晴らしさをもっと若い人びとにも画を通して鑑賞させたい！

小高　里佳子さん　佐倉市

絵がリアルで当時の様子が伝わるほどの絵ですね。悲しみと無念さが伝わります。戦争を知らない私は正直豊な日本しか知らないので想像できませんが、祖父母から話を聞いていたので、日本を守るために亡くなっていった方がたの思いが描かれているように思いました。

投稿

青函連絡船殉職者遺族会　函館市
会長　澁谷　武彦

忘れられない過去を振り返って

今日は八月十五日、終戦記念日です。

太平洋戦争も既に末期的症状を呈してきた昭和二十年七月十四日、十五日に本州、北海道をつなぐ大動脈切断を狙って青函連絡船集中攻撃の実体は次の通りでした。

翔鳳丸、飛鸞丸、津軽丸、第一青函丸、第二青函丸、第三青函丸、第四青函丸、第十青函丸、亜庭丸は沈没。松前丸、第六青函丸は座礁炎上。第七青函丸、第八青函丸は損傷。同時にこの爆撃によって犠牲になった船員の数は死者行方不明者など合計三百四十六名、遺族は千名を越えました。

敗戦によって食料も物資も失い危機は益々深刻になるなかで、働き手を失った遺族は、生きるための闘いを始めなければなりませんでした。あれから六十三年の歳月が流れてしまいました。あの時、一月早く終戦を迎えたらと今でも心から離れることが無く生活しております。

当時私は九歳、妹は六歳でそれからは母子家庭でした。父は松前丸機関部（操機手）に勤務し船は座礁炎上のため二十二名の殉職者を出し、火災のため遺体は散り散り五体ほど集め二十二名で分骨した当時の模様はいまだに頭からはなれません。

遺族の方も数年たち、ある程度の職に就き、少ない遺族年金で細々と生活をして来ました。

縁があり、国鉄青函局客車区に採用され、生活も落ち着いてきました。私は中学卒業後、民間に勤めていましたが、昭和三十一年に国鉄青函船舶管理局に採用され（親子三代）当初は機関掛としての勤務でしたが、身体がついて行けず事務部に転向し最低職である船舶給仕として勤務しながら勉強して船舶事務掛試験に合格し、管理部、首席事務掛、その後晴れて事務長に昇格し、船乗りとして憧れの新造船の受取りも経験することが出来ました。

昭和六十三年三月十三日国鉄青函連絡船就航の最終便、青森発十七時五分八甲田丸事務長として勤務を終えました。

これは単に自分の力でなく、あの函館山登山口入口の青函連絡船殉職者慰霊碑に奉られている父をはじめ殉職された諸先輩達の御霊の賜物と感謝しています。

青森港の岡の上に建立されている「青函連絡船戦災の碑」

慰霊碑の建立について

函館の中腹で母港函館に出入する連絡船を見守るが如く「青函連絡船海難者慰霊碑」が静かに立っています。この慰霊碑は、同僚殉職者の冥福を祈るために青函連絡船船員の発意と、これを基とし全国職員並びに関係者の協力により、昭和二十八年八月この地に建立されたものです。

昭和二十七年九月、国鉄労働組合青函船舶支部大会において、組合員一人百円づつ持ち寄って戦災七周忌に殉職者慰霊碑を建立することが満場一致で議決され、その他連絡船全職員が三十六万円醵金、これを基に青函鉄道管理局関係者と労働組合により青函連絡船殉職者功績顕彰会が翌二十八年四月に結成されました。

全国鉄職員および関係者の協力を得て集まった浄財は百四十七万四千九百七十円の多額にのぼりました。

既に遺族会も結成されていました。また、台風十五号で殉職された三百七十九名も合祀され法要については、青函連絡船管理局の好意で施主となり、祥月命日の七月十四日、九月二十六日に法要が執り行われていました。

民営分割後はJR北海道函館支社に引き継がれ遺族会は国鉄からJRの移行に伴い高齢化を理由に解散と

なりました。

その後、事情があり昭和二十年連絡船殉職者法要、台風十五号殉職者法要については、それぞれ六十回忌、五十回忌をもって遺族会に引き継ぐことになり急遽平成十七年に青函連絡船殉職者遺族会が再結成され現在に至っております。

慰霊碑清掃については、連絡船OB会、函館市の協力を頂いています。

法要については函館仏教協会のご協力により、あの敗戦直前の空襲と台風十五号による歴史に残る海難事故により尊い命を捧げた御霊に対して慰霊を行っております。

青函連絡船乗組員の法要行事が途絶えることなく、青函トンネル開通以来、青函連絡船の歴史が人々の話題に上がらなくなりつつある昨今、さらに時節の経過とともに人々の脳裏から消え去り風化すること忍び難く、せめて年一度の殉職者法要を青函連絡船殉職者遺族会が施主となり、函館市、JR、連絡船OB会、仏教協会など関係者各位のご厚情ご支援を賜り持続して行こうと切に考えております。

観光都市函館、函館山登山口、青函連絡船海難者慰霊碑前にて毎年七月七日十時より法要を執り行います。なお、台風十五号で亡くなられた方がたの慰霊碑は七重浜（洞爺丸が遭難した場所）に建立されております。法要は九月二十六日に執り行われます。

また、青森港の八甲田丸を背にした丘の上に青函連絡船が米軍の空爆を受けて全滅した惨劇を忘れることのないよう、青森市の有志により「青函連絡船戦災の碑」が平成十八年七月十四日に建立されました。

函館山登山口にある「青函連絡船海難者慰霊碑」

船乗りの夫を失って

熊本市　松下　トシエ

昭和十九年二月十一日紀元節の日に、海軍の軍属として南方に向かっているはずの夫が突然、大牟田のわが家へ帰ってきました。ラバウルの沖を航海中に敵機の至近弾を受け船はたちまち沈没、三時間あまり洋上を漂い、やっと味方の巡洋艦に救助されたとのことでした。

夫はフィリピンを航海する貨物船の乗組員で、支那事変がはじまった時から軍に召された御用船で海軍の軍属として任務についていました。昭和十九年いよいよ日米関係も風雲急を告げ、その緊迫する中を夫の乗組む「羽黒丸」は大船団を組んで南方へ輸送航海中だったのです。

帰宅してからの十ヵ月、夫は家で過ごし次の船の出来るのを待っていました。この十ヵ月の束の間の団欒こそが夫との生活の最後の日々となりました。夫はほとんど海上生活なのです。「ああ、やっぱり家はいいなあ。畳の上はいいなあ」と繰り返していました。そろそろ食糧事情も窮乏し、夫の好きなお酒も時たまの配給になりましたが、一升びんに三分の一ほどのお酒が手に入ったときの楽しそうな夫の顔が今も目に浮かびます。

年も押し迫った十二月、前触れもなく夫に乗船通知が届きました。まるで子供のように正月を楽しみにしていた夫でしたが、六歳の長女と二番目の子を身ごもっていた私の身を案じつつ、夕闇せまる駅を船会社のある遠い北海道へと旅立ちました。

その後、筆不精の夫からは、頻繁に便りがあり「南方への航海もできず函館と新潟を航海している。内地航海だから安心してくれ」と伝えてきました。出産を間近にひかえていた私は、義兄夫婦と姑を頼って、大牟田から夫の故郷である鹿児島県最南端の谷山町の山村に疎開しました。この山腹の村は鹿児島湾を囲んで真向かいが垂水の飛行場です。毎日、時を計ったように飛行場を襲撃する敵機が来ました。そして五月二十五日、私は次女を産みました。丁度麦刈りの忙しさもあって役場への出生届も人様に頼めず、結局子供の戸籍は五月三十日生まれとなりました。この頃には家の中にまで機銃弾が撃ち込まれ、そのたび乳飲み子をかかえて床下にもぐり込んで息をひそめました。

ある夜、鹿児島の市内が紅蓮の炎につつまれ夜通し燃え上がるのを家の窓からながめて、「日本はどうなるのだろうか、もしや敗けるのでは」

と思ったのも私一人ではなかったと思います。そんなある日、急に敵機が来なくなり「戦争は終わったぞ、日本は敗けたぞ」と口から口へ、人から人へと伝わってきました。「ああ、やっぱり敗けたのか」と思ったとたん体中から力が抜けてしまうほど大きなショックを覚えました。「よかった。これで何もかも、今までのことは終わったんだ。そうだ、戦争が終われば夫が帰ってくる」私は心の中で小躍りしました。無心な次女の笑顔にも心から喜ぶことができました。この時の私は、敗戦ということなど忘れ去っていました。もうすぐ夫が帰ってくるというそのことだけで、私の胸の中は一杯でした。私は広島、長崎の原爆投下、沖縄や内地の混乱、陛下の玉音放送のこともまだ知りませんでした。ただ、デノミとかで、お金の価値がなくなった紙幣を手に、世間の動きに一生懸命についてゆくだけでした。

夏が終わり秋となって、ぽつぽつ帰還する人も目にするようになっても、夫からは風の便りすらありません。ある日、とうとう来ました。それは他でもありません、私の差し出した夫への手紙です。「この者行方不明」という貼紙のついた手紙を手にした時の私の気持ちは今ここに書けません。知らずしらず目にあふれた涙、ふるえる手元、一気に力が抜けて座り込んでしまいました。それでも気をとりなおして手紙の束をひらくと、お産の床の中で書いた次女の出産を知らせる大事な手紙も入っています。涙がこぼれおちました。

十一月の半ばごろだったと思います。谷山の役場から一通の紙片が届けられました。「誠にお気の毒ですが…」と手渡された紙片には「松下勇吉　六月九日　青森沖にて　戦死時不詳」と書いてあります。ひそかに覚悟はしておりましたが、これが最後の宣告、ほんとうの、夫の戦死の公報です。…かわいそうに。わが子の出生も知らないままに逝ってしまったお父さん。涙がとめどなく流れます。その後、遺骨が還り、葬式を出しました。

本当に辛い日が続きました。お米の配給もなくなり、お金も使いつくし、乳も出ず、買出しの苦労も重なりました。

羽黒丸

取り出しては何回も読みかえす公報。やっぱり「戦死」と書いてある。涙にかすむ目に、「戦死」の二文字がまるで私に死ねと書いてあるように読めるのです。

昭和二十一年八月、引き揚げていた姉夫婦と母を頼って熊本の松橋に移りました。が、生後一年半の子を連れた女に仕事などありません。それでも人様のお世話で、ようやく生活保護を受ける道が開け、手伝うという条件でお百姓さんの物置小屋を貸してもらい、お針の仕事やら通いでの家事の手伝いなど、次女を連れて無我夢中で働きました。こうした苦しい生活の中で、長女は准看護婦の免許を得、次女は美容師の資格を取りました。私が得られなかった職を娘たちにはまがりなりにも得させました。まさかの時、その職を生かして強く生きてくれよと、私の願いはそれだけでした。私の家は、私が小学校五年生の時、一家の柱である父が中風でたおれ、そのため私は小学校卒業と同時に子守奉公に出され、長じては女中奉公と、結婚するまで習い事すらできず、手に何の職もありませんでした。長女の出産後には結核にかかり、二年ほど医者通い、服薬の生活でした。いつとはなく治ったとはいえ、やっぱり私のからだは弱いままです。その上に畑仕事も素人でしたから、大家さんの冷たい一言や次女の病院通い、長女の進学のことなど、今でも辛く悲しいものを私に思い出させます。

B－24爆撃機

しかし、このような私の人生に、短歌がありました。次のような歌が遺りました。

この渚夫の眠れる海の果て
還らぬ息吹を求め手を触る

戦死の報を死ねと読みつつ
子供等と食みし野蒜は今も青きか

在りし日の夫の乗り組む輸送船
この沖幾度通ひませしか

母子の記録かけば往時を思い出し
涙で原稿が又よごさるる

みちのくの遠き海原静なれ
召されし夫の還らざる海

殉職船員遺族援護事業

みんなのおたより

最後の運動会

徳島県　鎌野　佑実子

私の一番の思い出は、最後の運動会です。最も印象に残ったのは、金管バンドの演奏です。私が、先頭に立って、ピーという笛の合図で出発、その後から友だちがいろいろな楽器で、リズムを打って行進しました。指揮棒を上下にふって、ふるたびにリズムがかろやかになって、心地良かったです。

力一杯、全力を出しきった運動会、やりとげた事が自信になりました。

鎌野佑実子さん

お父さんと野球

宮城県　中野　真吾

ぼくは、四年生の春、大島少年野球チームに入りました。入ったばかりの時お父さんが良くチームの練習を手伝ってくれました。船に行く前の日もいっしょに練習して、その夏に事故になってしまいました。

そのチームが六年生の春、宮城、岩手選抜大会で初優勝して秋に三陸沿岸大会で三十二チームのトーナメントで二回目の優勝をすることができて、とてもうれしかったです。

中学に行っても野球を続けてレギュラーになりたいです。

中野真吾さん

高知県　岡元　美紀

いつもありがとうございます。上の子も来年の進路に今、悩んでいます。体育大会も無事終わり、勉強も忙しくなってきているようです。

宮城県　阿部　悦子

日日ありがとうございます。夏休みも終わり、身長もどんどん伸びて毎日が楽しみです。キャンプに二度参加し、とてもたくましく、成長しています。

宮城県　高橋　弘子

いつもお世話になりありがとうございます。

最近は倭も学校になれて来たようで「途中までお友だちと電車を一緒に乗って来た」とか「電車を降りる時寝ていたから知らないおばさんに起こされた」とか帰るとすぐに今日の出来事を話してくれます。

二人とも今が食べ盛りスタートのようで毎日の食事の量があまりにすごくて食事作りに疲れはてる毎日です。飛翔も受験をひかえている割にのんびりで困ってしまいます。今のところ、大きな病気もなく元気で頑張っています。

三重県　大竹　初美

いつも送金ありがとうございます。九月二十二日は、運動会でした。二人とも、元気に参加することができました。長女は六年生で、最後の運動会となり、当日の晴ればれしい姿に、この六年間でずいぶん成長したなと実感させられる一日でした。次女は、一年生で初めての運動会。ワクワクどきどきしながら応援していました。とても楽しい一日でした。

徳島県　鎌野　智美

お世話になっております。二人、勉強、部活、頑張っています。ありがとうございました。

島根県　上田　三千代

送金、いつもありがとうございます。我が家の娘（十八才）も就職が内定してホッとしているところです。十月に入り、すっかり秋らしくなってきました。もう少しで、私もおばあちゃんになります。長女が結婚して遠い所にとついで行きました。

宮城県　中野　幸枝

援護金ありがとうございます。子どもは今年最後の野球大会に向けて頑張っています。九月の三陸沿岸学童野球大会では三十二校の頂点に立つことが出来て、とても喜んでいます。お父さんに見せたかったです。

小学校の思い出

愛媛県　松田　忠士

お父さんが亡くなって六年たったけど運動会やふるさと祭り、いろいろな行事をがんばってきました。運動会は、色別リレーのアンカーで走って優勝しました。

これからは、野球をがんばりたいです。ぼくは、少年野球チームに入っていて、十一月に宇和島水産高校の船の事故でのハワイ交流のためハワイへ行きます。

同じ悲しみをもつ遺族の思いを心に感じて、ぼくができる役目をはたしてこようと思います。

松田忠士さん

思い出がいっぱい

三重県　大竹　玲那

入学してから早や六年が過ぎました。その間にいろいろな思い出ができました。その中の一番の思い出は、六年生最後の運動会の組立体操です。その技の中の一つに私は、とても苦手な「サボテン」という競技がありました。二人でする競技で練習はいつも失敗していました。がんばって練習したけどやっぱりできませんでした。それでも私はぜったいあきらめませんでした。その子のためにも、小学校最後の運動会でいい思い出をつくりたかったからです。

そして本番。「お願いあがって」と、体に力を入れ、友だちと心が一つになり成功しました。目から涙が出てきそうになり友だちと笑いあいました。組立体操の技は全部成功しました。すごく嬉しかったです。

みんなで一つの物を作りあげるすばらしさに感動しました。それは、友だちがいたからできたことです。このたくさんの友だちを大切に中学校へ行っても頑張ります。

大竹玲那さん

遺児援護金支給状況

平成19年４月現在

業種別遺児数

外航船社	内航船社	旅客運送業	その他	計
89人	153人	18人	９人	269人

支給遺児数の推移　（単位：人）

年度	外航船社	内航船社	旅客運送業	その他	計	年度	外航船社	内航船社	旅客運送業	その他	計
S58	13	7	0	0	20	H８	21	33	5	4	63
59	28	36	5	2	71	9	17	26	3	2	48
60	33	49	5	5	92	10	17	31	3	3	54
61	38	61	7	5	111	11	12	29	3	3	47
62	44	67	10	5	126	12	13	29	2	2	46
63	54	63	10	5	132	13	9	26	2	1	38
H１	58	71	10	4	143	14	7	32	3	0	42
2	59	63	13	9	144	15	5	28	3	0	36
3	60	69	11	9	149	16	2	23	2	0	27
4	56	56	8	8	128	17	2	21	2	0	25
5	54	58	10	7	129	18	0	20	2	0	22
6	53	58	9	8	128	19	0	16	2	0	18
7	28	38	6	5	77	小計	105	314	32	15	466
小計	578	696	104	72	1,450	合計	683	1,010	136	87	1,916

あの戦場体験を語り継ぐ集い

猛暑だった昨年の夏、まだその余波が残る九月二十一日、東京・日比谷公会堂において元兵士五十人が一堂に会して自らの戦場体験を語る「あの戦場体験を語り継ぐ集い」が開かれた。

この集会は、ボランティア団体である「戦場体験放映保存の会」と「社団法人マスコミ世論研究所」が主催した。

元兵士たちが戦場のあまりの悲惨さからその実体験を家族にさえ語れず、口を閉ざしているあいだに戦後六十二年が過ぎた。元兵士たちの平均年齢は八十歳代後半になった。所属部隊ごと、戦場ごと、出身地ごとにある戦友会も高齢化と相次ぐ逝去者により、会の運営が途絶えるようになった。こうした中、数人の元兵士を中心にその体験をＤＶＤにして後世に残そうという活動が生まれた。その活動の一環として開催されたのが今回の「あの戦場体験を語り継ぐ集い」である。

当日、会場は元兵士やその関係者とＤＶＤ作成活動のボランティアの若者等で満員。

集いに先立ち来賓として、高等商船卒、海軍予備少尉で「瑞鶴」航海士であった「戦没船を記録する会」会長の川島裕さん（八十六歳）が「繰り返すまじ戦没船の悲劇」と題して、太平洋戦争の戦域の拡大により海上輸送が不可欠となり、いかに多くの船舶と船員が、戦闘に巻き込まれ悲惨な最期を遂げたかを述べた。

発言予定者五十人の中には当日体調を崩し参加できない人が数名いたが、各自、二分という短い持ち時間を最大限に活かしそれぞれの体験を語った。

保存会では元兵士を探し出し、戦場の実相を語ってもらい、十五万人分の録画を目指している。最終的には映像資料館として後世に残す計画である。

川島裕さんと日比谷公会堂会場入口

旧全国戦没・殉職船員遺族会

解散に伴う事務引継ぎ

潮騒前号（二十四号）に掲載いたしましたとおり、全国戦没・殉職船員遺族会は平成十九年五月十一日の総会決議により解散いたしました。

これを受けて、去る九月二十八日当会事務室において旧遺族会会長堀田明道氏と当会理事長および常務理事との話し合いがもたれました。

内容の要点は以下のとおりです。

① 旧遺族会会長として参加していた当会主催戦没・殉職船員追悼式には堀田明道氏が遺族代表として出席する。戦時徴用船遭難の記録画展については、従来どおり堀田氏が当会の要請というかたちで出席する。

② 各慰霊祭への献花については、当会が代行する。

③ 経理については平成十九年度末までを清算期間とし、平成二十年度以降最終的に引継ぐこととする。

④ 旧遺族会の会員百四十六名については当会で引継ぐこととし、今回の話し合いに先立つ八月三十一日に、既に当会賛助会員及び協賛会員になっている五十六名を除く会員九十名に当会協賛会員についての案内を送付した。

なお、十二月一日現在の加入状況の詳細は左表のとおりです。

	摘　　要	人数（人）
1	新規加入者	15
2	死亡された方	3
3	転居先不明の方	2
4	加入しない旨連絡のあった方	1
5	12月１日現在連絡のない方	69
6	既当会賛助会加入者	3
7	既当会協賛会加入者	53
合　　計		146

物故船員慰霊祭に献花

昨年、各地で行われた殉職船員慰霊祭、物故船員慰霊祭に会長名にて献花し御霊のご冥福を祈りました。

○ 七月六日　横浜市・成田山横浜別院延命院「海の月間」横浜地区実行委員会「物故船員慰霊祭」

○ 七月十九日　北九州市・真光寺北九州海の日協賛会「殉職船員無縁塚慰霊祭」

○ 八月二十日　小樽市・手宮公園小樽船員ＯＢ会「物故船員合同慰霊祭」

○ 八月三十日　気仙沼市・唐桑町中（向ヶ森）海の殉難者慰霊碑前広場・唐桑町海の殉難者慰霊碑保存会「海の殉難者慰霊祭」

○ 九月二十六日　気仙沼市・明戸霊園慰霊塔前・気仙沼市海の殉難者慰霊塔保存会「気仙沼市海の殉難者慰霊法要」

○ 十月二十三日　福岡市・西公園光雲神社・福岡海寿会「以西底曳網漁船殉難者慰霊大祭」

○ 十月三十日　能登町・久田船長石碑前・久田船長顕彰会「久田船長碑前祭」

石川県能登町にある久田船長の碑前祭

ご寄付のお礼

平成十九年七月以降、次の方がたからご寄付をいただきました。厚く御礼申し上げます。（敬称略・順不同）

米山隆昭（東京都北区）、都竹利年雄（東京都杉並区）、三木千代子（丸亀市）、安田八束（横浜市）、海友会（高知市）、飯田耕作（東京都港区）、阿部健一（川崎市）、河野龍志（西予市）、髙井陸雄（東京都港区）、栗田嘉宥（神奈川県中郡二宮町）、宮﨑唯史（東京都大田区）、畑中義博（東京都江東区）、藤田稔彦（東京都江東区）、賞雅寛而（東京都江東区）、小嶋満夫（東京都江東区）、塚本達郎（東京都江東区）、萩原秀樹（東京都江東区）、大津彌八（東京都江東区）、内田洋子（東京都江東区）、矢吹英雄（船橋市）、稲石正明（東京都江東区）、陶山貢市（東京都江東区）、藤坂貴彦（東京都江東区）、小橋史明（東京都江東区）、岩坂直人（東京都江東区）、石橋　篤（東京都江東区）、南　清和（東京都江東区）、近藤逸人（東京都江東区）、伊東正夫（横浜市）、橋本一明（東京都江東区）、平野弘昭（東京都江東区）、川村雅志（東京都江東区）、佐藤吉信（東京都江東区）、大島正毅（柏市）、岩淵聡文（東京都練馬区）、内野明子（東京都品川区）、伊藤光雄（習志野市）、池田玲子（東京都港区）、濱田武士（平塚市）、石川和男（千葉市）

新加入会員ご紹介

当会は、基本財産の利息収入、日本海事センターの補助金、主要海運会社や関係団体等の賛助会費により運営されておりますが、平成十九年度より日本海事センターの補助金は打ち切られ、利息の減少や海運会社の合理化にともなう退会等と相まって厳しい運営を強いられております。

このような中で、ご遺族や関係者のご協力をいただき、慰霊、追悼、援護事業を支える協賛会員制度（年一口三千円）が設けられております。

ご加入いただける場合は、電話、葉書等でご一報下されば、郵便払込取扱票をお送りいたします。ご協力よろしくお願いします。

平成十九年六月以降、次の方がたが協賛会員に加入されました。ここに厚く御礼申し上げます。（敬称略・順不同）

◇　協賛会員

会田晴英（所沢市）、寺田宏子（横浜市）、伊藤征二（横浜市）、澁谷武彦（函館市）、山口英文（中津市）、冨田清明（池田市）、佐藤芳郎（横浜市）、城　弘子（横浜市）、高橋宏彰（東京都杉並区）、鈴木　保（東京都北区）、桝田　猛（大阪市）、苦瀬博仁（東京都江東区）、保　清勝（神戸市）、三田幸子（館山市）、一桝淑子（三浦市）、角尾保男（金沢市）、副田清子（太宰府市）、田中　稔（横浜市）、大木義男（越谷市）、川島　裕（東久留米市）、坂川八十三（西海市）、千葉甦一（東京都中央区）、林尚吾（東京都江東区）、小林美智子（横浜市）、桐原弘毅（東京都中野区）、佐橋幸彦（ふじみ野市）、橋田クニヨ（長崎市）、佐々木幸男（東京都世田谷区）、高野清三（相模原市）、野澤隆司（東京都中野区）、武山弘昭（神戸市）、桂木章年（北九州市）栗原宏（千葉市）、西村嘉子（多摩市）

海の殉難者慰霊法要

宮城県気仙沼市

第三十三回気仙沼市海の殉難者慰霊法要が、九月二十六日気仙沼市波路上の明戸霊園慰霊塔前で行われた。

遺族や関係者約二百人、当会からは、齋藤常務理事が参列、海難事故で亡くなった五百八十二柱の御霊を追悼するとともに、海難撲滅の誓いを新たにした。

気仙沼市海の殉難者慰霊法要

昭和五十年に建立された「海の殉難者慰霊塔」保存会の佐藤亮輔会長の挨拶、気仙沼市長の慰霊の辞、船主団体代表、船員団体代表がそれぞれ追悼の辞を述べた。

市内の各寺院の僧侶十四人による読経の中、参列者全員が焼香し、御霊の供養をした。

慰霊塔には一昨年十月に遭難した第七千代丸乗組員八人、タンカーと漁船からの海中転落者二人の計十柱が新たに祭られた。

法要終了後ご遺族の方々にお会いし、当会で例年五月に横須賀市の観音崎で行っている追悼式についてお知らせし理解を深めた。

事務局より

◇台風接近で「海の日」、記念清掃と献花式の中止

碑建立以来、毎年「海の日」記念の清掃と献花を続けてきた横須賀海洋少年団及び同父母の会は、台風接近による自然の猛威には勝てず昨年七月十五日予定していた恒例の行事をやむを得ず中止に致しました。

なお、終戦記念日を控えた八月十日に当会役職員が清掃を行い、拝礼致しました。

ホームページに『潮騒』を全面アップ

当会ホームページに『潮騒』の全面がアップされるようになりました。

紙面イメージをそのままで印刷することが出来ます。

次の要領でお進みください。

トップページ
⇦
刊行物などの紹介
⇦
読みたい号の潮騒のアイコンをクリック
⇦
読みたいページをクリック

◇ご投稿お待ちしています。

内容は随想、感想、本誌を通じてのご遺族や関係者の交流など自由です。字数に制限はありませんが、できれば千六百字程度にとりまとめ、関連の写真とご自身の顔写真がございましたら同封していただければ幸いです。なお、投稿は当会で若干修正させていただく場合もございますので、あらかじめご了承下さい。

編集後記

◆千葉市美術館で開いた戦時徴用船遭難の記録画展、来場者の方がたから二二五通の貴重な感想やご意見のアンケートを頂きました。紙面の関係でその一部のみのご紹介と致しましたが、記入頂きました方がたに、紙面をお借りしお礼申し上げます。

◆旧全国戦没・殉職船員遺族会の解散に伴い、当会が今後の扱いを引き継ぐことは、既に旧会員の皆様にはご案内のとおりです。微力ながら鋭意取り組んでまいりたいと思っております。具体的には本誌掲載の内容です。

皆様のご指導とご協力を切にお願い申し上げます。（齋藤）

ホームページ　http://www.kenshoukai.jp　Eメール　kenshoukai@isis.ocn.ne.jp